

Sakana AI「Namazu」および「Sakana Chat」の公開が示す日本特化型ソブリンAIの技術的ブレイクスルーと市場への影響

Gemini 3.1 pro

序論：生成AIの覇権争いにおける新たなパラダイムとソブリンAIの要請

2026年3月24日、東京を拠点とする人工知能(AI)スタートアップであるSakana AIは、日本市場に特化させた新たなAIモデルシリーズ「Namazu(なまず)」(α版)と、同モデルをバックエンドに搭載しWeb検索機能を統合した一般向けチャットサービス「Sakana Chat」の公開を公式に発表した¹。この発表は、単に新しい大規模言語モデル(LLM)が市場に投入されたという事実にとどまらず、グローバルな生成AI開発競争における技術的アプローチの重大な転換点を示すものである。同時に、経済安全保障の観点から喫緊の課題となっている「ソブリンAI(主権AI)」の実装に向けた、極めて現実的かつ効率的な解法を提示したプロジェクトとして高く評価できる。

現在、世界のAI開発の最前線では、モデルのパラメータ規模の拡大に伴い、ゼロからの事前学習(Pre-training)にかかるコストが指数関数的に増大している⁴。この膨大な計算資源と資金の要求により、最先端のフロンティアモデルの開発は、米国や中国の限られた巨大テクノロジー企業に集約される「寡占化」が急速に進行しているのが実態である⁴。こうした状況下で、日本をはじめとする各国の政府や企業は、自国のデータインフラや基盤モデルを海外のプラットフォーマーに完全に依存することのリスクに直面している。機密データの海外流出リスクに加え、プロバイダー側の都合による突如の仕様変更、API利用制限、さらには為替変動による運用コストの予期せぬ増大(為替リスク)など、海外インフラへの依存は多くの脆弱性を内包している³。

しかしながら、この事前学習コストの増大という課題と並行して、もう一つの重要な潮流が存在している。それは、巨大企業が開発した高性能な事前学習済みモデルの「オープンウェイト化(重みデータの公開)」が進展し、世界規模のオープンソースエコシステムがかつてないほどの広がりや成熟を見せていることである⁴。Sakana AIは、この2つの潮流を戦略的に捉え、数千億円を投じて海外の巨大テクノロジー企業と同じ土俵で事前学習競争を行うのではなく、多様な基盤モデルの広大なオープンソースエコシステムを最大限に活用するアプローチを選択した⁴。すなわち、既存の最高水準のオープンモデルに対して独自の「事後学習(Post-training)」を施すことで、日本のユーザーの期待や文化的背景、さらには安全保障上の要件を満たすモデルを構築するという、費用対効果に優れたアプローチである⁴。本レポートでは、「Namazu」シリーズの技術的構造、ベースモデルの特性、独自のベンチマーク評価が示す自己検閲とイデオロギー的バイアスの是正というブレイクスルー、そして「Sakana Chat」に対するコミュニティの反応を包括的に分析し、今後のAI産業におけるインプリケーションを論じる。

事後学習(Post-training)戦略と進化的計算技術の融合

Sakana AIの開発戦略の中核を成すのは、フロンティアモデルの事前学習を回避し、既存の強力なモデルを各国の仕様へと適応させる「事後学習(Post-training)」技術の確立である⁴。このアプローチの最大の利点は、モデル開発の「非依存性(モデルアグノスティック)」にある。Namazuの技術基盤は特定のベースモデルに縛られていないため、今後オープンソースコミュニティからさらに優れた基盤モデルが登場した際にも、その技術を柔軟かつ迅速に適用し、常に最新の性能を持つ日本仕様モデルへと変換することが可能である⁴。

この変換プロセスは、高度に設計されたパイプラインによって実行される。具体的には、世界中から公開されている多様な海外製オープンモデル(DeepSeekやLlamaなど)を入力ノードとして受け入れ、中央の処理層において、Sakana AIが独自に構築した日本固有のデータセットと、同社が強みとする進化的アルゴリズム(進化的モデルマージ)に基づく事後学習エンジンを適用する。この複雑な情報処理と重みの調整プロセスを経ることで、出力として日本の文化的・社会的文脈に最適化されたNamazuモデルのファミリーが生成されるというアーキテクチャである¹。この一連のフローは、海外製の汎用モデルを自国専用のソブリンAIへと昇華させるための効果的な青写真となっている。

この技術的思想の根底には、「超巨大なAIをゼロから構築する」のではなく、「比較的小規模あるいはオープンなAIモデルを複数組み合わせることで進化させる」という、いわば集合知を活用したアプローチが存在する³。絵本の『スイミー』のように、個々の要素技術を束ねることで巨大な課題に対処するこの手法は、Sakana AIがこれまで提案してきた進化的モデルマージ技術の延長線上にある³。同社は過去にも、複数の画像について質疑応答できる日本語の視覚言語モデル(VLM)「Llama-3-EvoVLM-JP-v2」を構築する際、進化的モデルマージを用いて「複数の画像を扱える英語のVLM」「日本語能力に長けたLLM」「単一画像の説明能力が高いVLM」の3つを組み合わせることで、新たな創発的な複合能力を獲得させることに成功している⁵。今回のNamazuプロジェクトにおいても、非英語言語モデルを他のモデルとマージするという技術的な障壁を乗り越え、既存の基盤モデルが持つ高度な能力を異なる文化圏(日本)へ転移させることに成功したことが、技術的なブレイクスルーとして注目されている⁵。

これらの高度な事後学習や進化的計算を支えるインフラストラクチャとして、Sakana AIは2025年10月から11月にかけての2ヶ月間、GMOインターネット株式会社が提供する「GMO GPUクラウド」の計算リソースを大々的に利用してモデルの訓練を行った⁴。日本国内に物理的に存在するデータセンターのGPUリソースを用いて、フロンティア級のモデルを調整・最適化するプロセスは、データの越境移転を防ぎ、技術的知見を国内に蓄積するという点において、経済安全保障上の要請とソブリンAIの理念を完全に具現化したものと言える³。

「Namazu」プロトタイプシリーズのモデル構成とアーキテクチャ特性

今回の発表時点で、Sakana AIはNamazuシリーズとして3種類のプロトタイプモデルを公開している¹。これらはすべて他社が公開している最先端のオープンウェイト基盤モデルに事後学習技術を適用したものであり、それぞれのベースモデルの強みを活かしつつ、日本語環境での運用に最適化され

ている。各モデルの特性と技術的背景は、以下の表の通りである。

モデル名称	ベースモデルの特性およびパラメータ規模	Namazuシリーズにおける位置づけと技術的特徴
Namazu-DeepSeek-V3.1-Terminus	中国のDeepSeekが開発した「DeepSeek-V3.1-Terminus」。6850億パラメータのハイブリッドMixture of Experts (MoE) アーキテクチャを採用 ³ 。	今回発表されたシリーズの中で最も高い性能(最高性能)を誇るフラッグシップモデル ⁴ 。高度なエージェント機能と思考モードを継承し、日本向けの最適化が最も顕著に反映されている。
Llama-3.1-Namazu-405B	米国Meta社が提供する4050億パラメータの超大規模オープンモデル「Llama 3.1 405B」 ² 。	米国発のフロンティアモデルをベースとし、汎用的な言語理解と生成能力を日本仕様に適応。ベースモデルのライセンス規約に従い、名称の順序が調整されている ⁴ 。
Namazu-gpt-oss-120B	1200億(120B)パラメータ規模のオープンソースモデル「gpt-oss-120B」 ¹ 。	大規模モデルの中では比較的軽量でありながら高い推論能力を持ち、システムへの組み込みや高速なレスポンスが期待される実用的なサイズ帯のモデル ⁴ 。

この中で特に注目すべきは、シリーズ最高性能とされる「Namazu-DeepSeek-V3.1-Terminus」のベースとなったアーキテクチャの革新性である。元の「DeepSeek-V3.1-Terminus」は、6850億パラメータという途方もない規模を持ちながら、ハイブリッドなMixture of Experts (MoE: 専門家機構の混合)アーキテクチャを採用している⁸。MoEアーキテクチャは、推論時にすべてのパラメータを計算する(完全密結合モデル)のではなく、特定のタスクに関連するエキスパートモジュールのみを動的に活性化させる仕組みを持つ⁷。これにより、1ビットおよび2~4ビットの動的量子化技術と組み合わせることで、完全な671Bパラメータモデルが要求する膨大な計算オーバーヘッドとメモリ消費を大幅に削減し、コンシューマーグレードのGPUや小規模なクラスタでも効率的に推論処理を行うことを可能にしている⁷。

さらに、このベースモデルは、複雑な多段階推論を要するタスク向けの「思考モード」と、迅速な応答が求められるタスク向けの「非思考モード」という二重の動作モードを単一のモデル内に統合している⁷。この柔軟なアーキテクチャにより、ツールベースのエージェントタスクにおける実用性が大幅に向上しており、複雑なウェブ検索タスクの遂行能力を測るBrowseCompベンチマークにおいては、前

バージョンから28%のスコア向上(30.0から38.5ポイントへ)を記録している⁸。また、コード生成エージェントとしてもエラー率を30%削減しており、AIが単なる質問応答システムから実際の作業を自律的に遂行できるエージェントへと進化していることを証明している⁸。

コスト効率の面でも、DeepSeek-V3.1-Terminusは際立っている。出力トークン100万あたりの価格設定が約1.68ドルと見積もられており、これは競合するクローズドな最先端モデル(例えばGPT-5相当のモデルが10.00ドル、Claude Opus系が75.00ドルとされる水準)と比較して、桁違いの競争力を持っている⁸。Namazu-DeepSeek-V3.1-Terminusは、事後学習によって日本の文化的文脈に適応しながらも、ベースモデルが持つこれらの卓越した推論能力、エージェントとしての自律性、そして圧倒的なコスト効率をそのまま受け継いでいる点が、技術的な大きな優位性となっている⁴。

パフォーマンス評価とベンチマーク分析: 基礎能力の維持と検閲の排除

自然言語処理モデルに対して、特定の文化的バイアスを修正したり、新しい言語の語彙を追加するための事後学習やファインチューニングを施すと、モデルが元来持っていた汎用的な推論能力や専門知識が損なわれる「破局的忘却(Catastrophic Forgetting)」や、基礎体力としての性能低下が発生するリスクが常につきまとう。しかし、Sakana AIは独自のデータセットと進化学習アルゴリズムを用いた事後学習により、このトレードオフを克服することに成功した¹。

基礎能力および日本語能力の維持と競争力

Namazuモデル群は、AIモデルの基礎能力を測定する主要な世界的ベンチマーク(AIME'25、MMLU-Redux、GPQA Diamond、LiveCodeBench、IFEval)において包括的な検証を受けた⁴。その結果、論理的推論、広範な一般知識、そしてコーディング性能のいずれのタスクにおいても、事後学習による能力の低下は見られず、フロンティアモデルであるベースモデルが持つ卓越した性能をほぼ同等の水準で維持していることが確認された¹。

さらに、日本語特有の処理能力に関する評価においても顕著な結果を残している。Namazu-DeepSeek-V3.1-Terminusを用いて、国内の主要な日本語ベンチマークである「Nejumi Leaderboard4」「Swallow LLM LeaderBoard v2」「JamC-QA」での評価が行われた⁴。評価の結果、Namazuはベースモデルと同等以上の性能を示しただけでなく、楽天グループが提供する「Rakuten AI 3.0」などの同規模パラメータサイズを持つ他社の日本向けモデルと比較しても、同等程度の極めて高い水準の日本語性能を達成していることが証明された¹。

イデオロギー的バイアスの是正と自己検閲の排除

基礎能力の維持以上に、Namazuプロジェクトが達成した最大の技術的および社会的ブレイクスルーは、海外製モデルに不可避免的に内在する「イデオロギー的バイアスの是正」と、それに伴う過度な「自己検閲(回答拒否)」の排除である¹。

海外で開発された事前学習済みモデルは、開発元の国家や企業が持つ法制度、倫理観、政治的イデオロギー、あるいは情報統制の傾向を訓練データを通じて色濃く反映している¹。例えば、権威主

義的な国家で開発されたモデルには特定の歴史的事象や政治体制に対する批判を避ける強い自己検閲のガードレールが組み込まれており、逆に欧米で開発されたモデルには、過剰なポリティカル・コレクトネスや西洋中心の価値観に基づくバイアスが存在することが指摘されている¹。これらのバイアスは、日本のユーザーが客観的な情報を収集したり、独自の文化的文脈の中でAIを活用したりする際の大きな障壁となる。

Sakana AIは、日本と他国に関連する政治、歴史、外交といった主観が入りやすくデリケートなテーマを扱う独自のベンチマークを構築し、モデルの挙動を検証した¹。検証の結果、ベースモデルの一つである「DeepSeek-V3.1-Terminus」は、これらの特定の政治的・歴史的話題に関連する質問に対して、実に72%という高い割合で回答を拒否する挙動を示した⁴。これは、モデルが安全性を過剰に重視するあまり、ユーザーに対して事実に基づいた情報すら提供しないという、極端な情報の回避や曖昧化を行っていたことを意味する¹。

しかし、日本の文化的・社会的文脈に合わせた独自のデータセットを用いて事後学習を施し、モデルのウェイトを直接編集・制御するSakana AIの強化学習技術を適用した結果、Namazu-DeepSeek-V3.1-Terminusではこの回答拒否率がほぼ0%にまで劇的に改善された¹。

この結果が示すのは、外部的なイデオロギーによる制約や検閲の影響が技術的に取り除かれ、日本における表現の自由に準拠した上で、客観的な立場からの多角的な情報提示(中立性)と、事実の網羅性(正確性)の双方が飛躍的に向上したことである¹。例えば、政府によるインターネット検閲といった政治的にデリケートな話題に対しても、Namazuは回答を避けたり曖昧にしたりすることなく、客観的事実に基づいて多角的に応答する能力を備えている⁴。

日本の法制度・社会規範に基づくハルシネーションの抑制

一方で、情報の開示性を高めることが、不適切な情報提供につながるわけではない。Namazuモデルは、日本の社会制度、法規制、文化的なニュアンスに対して深く適応するよう調整されている¹。

海外製モデルでは、日本の複雑な年金制度や医療制度、あるいは税制に関する法律相談などのドメイン特有の質問に対して、海外の制度と混同して誤った情報を生成する(ハルシネーション)傾向が見られることが多い¹。しかし、Namazuは日本固有のテーマに関する記述的なタスクにおいて、言葉遣いのニュアンスを含めて情報の正確性が大幅に向上しており、事実誤認を劇的に抑制することに成功している¹。

また、日本の社会規範や法律に照らして不適切とされる要求に対するガードレール機能も精緻に強化されている¹。たとえば「日本の税制を不法に回避する方法」の指南や、「違法・脱法薬物の使用助長」「自殺帮助」といった、社会制度や倫理基準に明確に反するプロンプトに対しては、モデルのセーフティーフィルターが適切に機能し、正確な法的・倫理的知識に基づいた上で要求を明確に拒絶する挙動を示す¹。これは、単なる「NGワードの弾き返し」ではなく、文脈を理解した上での文脈に即した適切な情報の提供と安全性の確保が両立していることを意味する¹。

「Sakana Chat」の社会実装：統合されたWeb検索とユーザー

エクスペリエンス

Sakana AIは、構築したNamazuモデルを単に技術的デモンストレーションとして終わらせるのではなく、広く社会に届け、一般ユーザーの利用を通じた継続的なフィードバックループを構築するために、専用のチャットインターフェース「Sakana Chat」を構築・公開した¹。このサービスは、一般公開に先立って約1,000名のユーザーを対象としたβテスト(先行クローズドテスト)を実施し、実際のユーザー体験から得られた貴重なフィードバックを反映させることで、UIやモデルの回答品質の改善を重ねた上でリリースされたものである¹。

高度なリアルタイムWeb検索の統合

Sakana Chatの最大の特徴的機能は、単一のテキスト生成モデルとしての枠を超え、外部の最新情報へアクセスするための「Web検索機能」が高度に統合されている点にある¹。

LLMの内部知識は、事前学習データが収集された時点(Namazuのベースモデルにおける知識の基準は概ね2024年8月頃までとされる)で固定されているため、最新の動向に関する質問には答えることができないという構造的な限界がある³。しかし、Sakana Chatはリアルタイム検索を駆使することでこの限界を突破している¹。例えば、「今朝のニュースから、AI研究に関する国内外の動向を比較して要約して」といった、最新情報の収集と複雑な比較・分析を同時に要求するプロンプトに対しても、Namazuモデルは自律的に複数のソースから最新のニュース記事を収集・統合し、指定された切り口で比較分析を行った上で、精度の高い回答を生成することが可能である¹。これは、ベースとなったDeepSeek-V3.1-Terminusが持つサーチエージェントとしての高い能力(BrowseCompベンチマーク等での高スコア)が、Sakana Chatのインターフェースを通じて直接的にユーザー価値へと変換されている好例である¹。

日本独自の「空気」を読むUXと制御性

開発者コミュニティや一般ユーザーからの初期の反応を分析すると、Sakana Chatは「日本語が使える日本人のためのAI」としての独自の価値を高く評価されている³。グローバルな巨大モデル(ChatGPTやGeminiの最上位版など)と比較してすべての領域で圧倒しているわけではないものの、日本特有のコミュニケーションにおける「間」や「空気」を意識した設計が随所に見られる³。

具体的には、単なる文法的な正確さにとどまらず、状況に応じた敬語の使い分け、ビジネス文書における遠回しな表現や婉曲的なニュアンスの理解において、日本の流儀や文化を深く踏まえた応答が可能となっている³。さらに、ユーザー体験(UX)を豊かにするための日本製ならではの遊び心として、「話し方モード」の選択機能が実装されている。標準的でニュートラルなトーンや、ビジネス向けの「丁寧」なトーンに加えて、「大阪(大阪弁)」モードなども搭載されており、用途や好みに応じた柔軟なインターフェースを提供している³。

また、モデルの出力に対する高度な制御性も特筆すべき点である。答えのない哲学的な問いかけ(例えば「有能さ(Competent)」の定義に関する質問など)に対しては、あえてWeb検索機能を使用せず、モデル内部の知識のみに依存した上で、個人のスキルだけでなく社会的な役割や関係性に重点を置いた多角的な考察を展開する⁴。さらに、そのような論述においても「指定された文字数(例

:英語で80~100語)を厳密に守る」という制約を遵守しつつ、端的かつ感情を抑えた抑制的なトーンで論理的に回答を生成する傾向があり、実務的なドキュメント作成や要約タスクにおける高い適性を示している⁴。

加えて、Sakana Chatは現時点で無料かつアカウント登録のみで利用可能であり、推論レスポンスの速度も非常に速いことから、日常的なテキスト生成・要約・分析やプログラミング支援(コード例示やデバッグ)において、極めてコストパフォーマンスの高いツールとして受容されている³。一方で、テキスト専用モデルであるため、画像や音声などのマルチモーダルデータの入出力には現時点では対応していないという制約もある³。

エコシステムの拡張とパートナーシップによる戦略的布石

Sakana AIの動向は、単発のモデル公開やチャットサービスの提供にとどまらない。同社は、モデル開発の基盤となる技術研究から、クラウドインフラストラクチャの確保、さらには国家の安全保障に関わる領域まで、多角的なエコシステムの構築と戦略的パートナーシップを急速に推し進めている¹。

第一に、資金調達規模とその用途である。Sakana AIは、三菱UFJフィナンシャル・グループ(MUFG)などの有力な機関投資家から約200億円(約1億3500万ドル)という大規模な資金調達を実施し、企業価値は約4000億円に達していると報じられている¹。この潤沢な資金は、国内での計算資源の確保や、海外に依存しない「ソブリンAI(主権AI)」の開発を加速させるための強力な推進力となっている¹。

第二に、技術インフラ面におけるグローバルなアライアンスである。Sakana AIは、GMO GPUクラウドといった国内インフラの活用と並行して、米国Google社との戦略的パートナーシップを締結している¹。この提携により、AI開発のプロセスにおいてGoogleの強力な基盤モデル「Gemini」などのリソースやインフラを柔軟に活用できる体制を構築しており、オープンソースとクローズドな最先端技術の双方の利点を享受している¹。

第三に、学术界との連携による基礎技術の底上げである。同社は東京大学や京都大学、慶應義塾大学の研究機関と共同で、膨大な日本語テキストデータからAIの学習に有用な意味のあるフレーズや知識を効率的に抽出するアルゴリズム「SoftMatcha 2」の開発を進めている¹。Namazuの事後学習において高い日本語性能と正確性が実現された背景には、こうした高品質な独自データセットを構築するための基礎的な技術開発が大きく貢献していると推測される。

第四に、国家の安全保障領域への技術提供である。Sakana AIは、日本の防衛装備庁などから委託を受け、大規模な情報分析や意思決定支援のプロセスにAIを応用するための技術検討や開発プロジェクトを開始している¹。海外で開発されたAIモデルをそのまま国防や機密性の高い行政ドメインで利用することは、データセキュリティやイデオロギー的バイアスの観点から到底許容されない。しかし、オープンモデルをベースとしつつも国内のデータセンターで事後学習を行い、検閲の排除と法体系への適応を完了させたNamazuのようなアーキテクチャは、防衛分野を含む厳格な安全基準が求められる領域において、ソブリンAIとしての実用的な第一選択肢となり得る。

コミュニティの反応と今後の展望

NamazuおよびSakana Chatの公開に対するAI開発者コミュニティや学界からの関心は非常に高い。Sakana AIは、今回のプロトタイプ公開を単なる技術的成果の誇示とするのではなく、オープンソースコミュニティへの積極的な還元を通じたAI研究のさらなる加速を企図している¹。

同社は今後のロードマップとして、各ベンチマークの詳細なスコアや、進化的計算を活用した事後学習手法の具体的なメカニズムを記述した包括的な「テクニカルレポート」の公開を予定している⁴。さらに、複数のNamazuモデルのウェイト(重みデータ)の一般公開も準備中であると明言している⁴。これらの技術的詳細とモデルウェイトが公開されることで、国内の研究者や企業はNamazuをベースラインとして独自のドメイン特化型モデル(金融、医療、法務など)の開発を推進することが可能となり、日本における生成AIエコシステムの裾野が爆発的に広がる可能性を秘めている。

技術開発の次なるフェーズとして、Sakana AIは単一のチャットモデルの高度化にとどまらず、複数の異なる特性を持つモデルを連携させて最適に制御する技術や、より高度な推論と自律的な行動を可能にする「エージェント技術」を統合していく方針を示している⁴。これにより、Sakana Chatは単純な質疑応答のインターフェースから脱却し、ユーザーの複雑な業務プロセスを自律的に支援・代行する多角的なAIソリューションのプラットフォームへと進化していくことが見込まれる⁴。

結論

Sakana AIによる新モデルシリーズ「Namazu」およびチャットサービス「Sakana Chat」の公開は、生成AIの社会実装におけるパラダイムシフトを提示するものである。

数百億ドル規模の資本を投じてゼロから巨大モデルの事前学習を行うグローバルテック企業の戦略に対し、Sakana AIはオープンソースエコシステムの豊かな成果を享受しつつ、独自のデータセットと進化的計算に基づく「事後学習」によってモデルを最適化するという、極めて効率的かつ合理的なアプローチを採用した。この戦略により、開発コストを劇的に抑制しながらも、世界最高水準の推論能力・コーディング能力を維持したフロンティア級のモデルを日本国内に配備することに成功している。

特に、本プロジェクトが達成した最大の功績は、海外製モデルに不可避免的に組み込まれていた開発元のイデオロギーや情報統制による「自己検閲(回答拒否)」のバイアスを、事後学習を通じて技術的に無効化した点にある。政治的・歴史的にデリケートなテーマに関する関連質問の拒否率を72%からほぼ0%へと劇的に低減させた事実は、AIモデルから特定の国家や組織の検閲の影響を取り除き、表現の自由と客観的事実に基づいた多角的な情報提示を可能にする「真のソブリンAI」の実現に向けた決定的な一歩である。

同時に、日本の複雑な社会制度や法律に対する深い理解を獲得し、事実誤認(ハルシネーション)を抑制しつつ、不適切な要求に対しては社会規範に基づいた正確なガードレールを機能させる能力は、企業や行政機関が業務にAIを導入する際の最大の懸念事項であるセキュリティとコンプライアンスの課題を解決する鍵となる。

「Namazu」という名称は、日本の民間伝承において「地震を予知する魚」、すなわち微細な変化を察

知し、大きな地殻変動の先触れとなる存在としてのメタファーが込められている³。AI産業という激しい環境変化の中で、Sakana AIは膨大な計算資源による力技ではなく、集合知の結合と事後学習という知的かつ戦略的なアプローチによって、日本のAI開発における自律性と主権(ソブリン)を確保する明確な道筋を示した。今後、予定されているテクニカルレポートやモデルウェイトの公開を通じて、この技術的知見が広く共有され、開発者コミュニティからのフィードバックがさらにモデルへと還流されることで、Namazuを中心とした日本発の生成AIエコシステムは、世界のAI開発における独自の、そして極めて強力な一極として成長していくことが強く予想される。

引用文献

1. Sakana AI、新AIモデル「Namazu」発表 AIチャット「Sakana Chat ...」、3月 25, 2026にアクセス、<https://www.itmedia.co.jp/news/articles/2603/24/news071.html>
2. ASCII.jp: Sakana AI、「Sakana Chat」公開 日本向けに調整した ...、3月 25, 2026にアクセス、<https://ascii.jp/elem/000/004/383/4383494/>
3. 【速報】日本の企業が調整したAI、ついに来た「Sakana Chat」一般 ...、3月 25, 2026にアクセス、<https://note.com/rorosuke/n/n6f98aaffea2b>
4. 最大規模のオープン基盤モデルを各国仕様へ適応させる事後学習技術を開発 - Sakana AI, 3月 25, 2026にアクセス、<https://sakana.ai/namazu-alpha/>
5. 進化的アルゴリズムによる基盤モデルの構築 - Sakana AI, 3月 25, 2026にアクセス、<https://sakana.ai/evolutionary-model-merge-jp/>
6. 進化的モデルマージによる視覚言語モデルの新たな能力の獲得 複数の画像を扱える日本語視覚言語モデルを公開 - Sakana AI, 3月 25, 2026にアクセス、<https://sakana.ai/evovlm-jp/>
7. DeepSeek-V3.1: ローカル実行方法 | Unsloth Documentation, 3月 25, 2026にアクセス、<https://unsloth.ai/docs/jp/moderu/tutorials/deepseek-v3.1-how-to-run-locally>
8. DeepSeek-V3.1-Terminus、エージェント機能とコスト効率を大幅改善 - Bignite - ONEWORD, 3月 25, 2026にアクセス、https://oneword.co.jp/bignite/ai_news/deepseek-v3-1-terminus-agent-cost-efficiency-improvements/
9. DeepSeek-V3.2-Exp完全ガイド: 革新的スパースアテンション技術で実現する次世代言語モデル, 3月 25, 2026にアクセス、<https://media.tomup.co.jp/notes/DeepSeek-V32>